



平成23年度第2回講演要旨

考古学から見る『武家の古都・鎌倉』

講師：河野眞知郎さん（鶴見大学文学部教授 専門：日本中世考古学）

とき：平成23年10月8日（土） ところ：鎌倉芸術館

◎普遍的価値と評価基準

12世紀末に鎌倉に政権の拠点を置いた武家は、13世紀半ばから中国伝来の禅宗を摂取し、自らの倫理観や行動規範などの精神的基礎を醸成して独自の文化を築いた。以後700年に及ぶ武家政権の始発点であり武家文化が創出された唯一の物証である鎌倉は、権力強化に活用した神社や寺院、それらと組み合わせ効果を発揮させた居館・交通路・港などが、山陵部と一体となっており、稀に見る政権所在地の類型となっている。そのような鎌倉の特質が、文化的伝統または文明の存在を伝える物証として無二の存在であるという評価基準(iii)、歴史上の重要な段階を物語る建築物、その集合体、科学技術の集合体、あるいは景観を代表する顕著な見本であるという評価基準(iv)に該当する。

◎考古学的な「遺跡」の意味

武家の古都・鎌倉に含まれる重要な要素のうち、考古学的な遺跡は、寺院跡・武家館跡・切通そして港跡であるが、現存する寺社なども考古学の対象となる。鎌倉は土地が低くて洪水になりやすく、土砂で地固めをしたため、現在まで伝わっている寺社でも、鎌倉時代の地表は地下に埋まっている。そのため八幡宮以下建長寺・円覚寺・瑞泉寺・大仏殿跡・浄光明寺・称名寺などで発掘調査がなされてきた。

建長寺の伽藍は江戸時代の再建であるが、1331年の指図（江戸時代の書写）では、中国の絵図を参考にして伽藍が直線的に並ぶ配置となっている。発掘によって発見された遺構は、指図に一致することが分かった。現在もその基本的な配置は継承されている。創建当初のものではなくても、木造建築であるから修理しながら同じ場所に同じ様式で建てられているところに価値がある。

切通の道は出土品などから鎌倉時代から使い続けられていたらしいことがわかる。名越切通の逗子側は、放置すると崩れる危険性があるため、樹脂を染みこませるなどの整備工事が行われている。まんだら堂やぐら群には多くのやぐらがあり、やぐら前の平場からは火葬の遺構が見つかった。切通の墓には、境の地で死者をあの世に送り出すという意味があるともいわれている。やぐら内の石塔などは長い間に持ち出されたりして



北条氏常盤亭跡

いるが、安易に元に戻すと遺跡の捏造になるおそれがある。樹木の根によってやぐらが崩れる危険性などもあって、保存に苦慮している。

永福寺跡の発掘では、左右に阿弥陀堂と薬師堂を配した二階堂の遺構が出土した。10年にわたる調査を終え、遺構の上に一定の土を被せて、池の位置や参道・橋などがわかるような形で遺構の復元整備をしている。昔の姿が観てわかるようにしなければ、世界遺産として評価されないおそれがある。

◎北条政村の常盤亭跡

鎌倉初期では武家の居館などは掘立柱で、土台石を用いるのは中期以降である。昭和55年に発掘調査した常盤亭跡では土台石が用いられていた。発掘は一部に過ぎず全体像はまだわからないが、硯や水滴などがかなりの数出土しており、文化の香る亭だったことが分かる。『吾妻鏡』には、弘長3年(1263)この亭で一日千首の探題和歌の催しがあったことが記されている。戦士集団である武家が和歌を詠むという高度な精神文化を身につけたのは、世界に例がない。武家の居館跡からそのような武家文化がわかるようにする工夫が必要である。

◎武家文化を理解してもらうために

鎌倉ではおびただしい出土品がある。世界遺産はあくまで不動産であるが、そこに含まれる遺物からの理解も不可欠で、それらをガイダンスする施設が必要である。武家屋敷跡から出土した、警護の番文が記された木札などによって、武士たちの多くは地方から出仕し、有力な御家人の家来となったりしながら鎌倉と地方を結び付けていたことがわかる。出土品を通じてそうした武士たちの生活や文化がわかるようにすべきである。

その他、仏像類、蹴鞠の場や四季の花などをあしらった染型板、本歌取りのような漆器の紋様、花瓶・香炉などの出土品は、武士階級のみならず市街地の住民まで各家で仏を祭り、持仏を身につけていたらしいことなど、高度な生活文化を物語っている。